

## 大東文化大学 博士学位論文審査報告書

氏名	陳 <sup>チン</sup> 柏 <sup>ボク</sup> 儀 <sup>ウエン</sup>
学位	博士（書道学）
学位記番号	甲第107号
学位授与年月日	平成26年3月22日
審査研究科	文学研究科
論文題目	〈勢〉に関する術語の研究 —漢より唐にかけての書論を中心に—
論文審査委員	(主査) 大東文化大学教授 河内 利治 (副査) 大東文化大学教授 安達 直哉 (副査) 大東文化大学教授 澤田 雅弘 (副査) 筑波大学人間総合科学研究科教授 中村 伸夫

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

## 1. 論文の要旨および特色

〈勢〉という言葉は、中国では古来より政治や兵法など様々な分野、事象において使用され今日に至っている。現代日本語においても、「いきおい・活動する力」としての優勢、虚勢、権勢、「なりゆき・ようす」としての情勢、形勢、趨勢、「むれ・人の集り」としての加勢、軍勢など多様に使用されている。論文の特色は、このように一般に使用される〈勢〉の言葉を、特に書法美学の視点から考究し、体系化を図ろうとした点にある。そのために漢代から唐代にかけての書論に見える〈勢〉の術語を抽出し、整理し、解釈し、分類し、それを三つの中心的な要素、〈象〉〈形〉〈力〉に帰納して考察し、さらに〈勢〉の持つ四つの特性および審美術語と関連づけ、〈勢〉を中心とする相関図を構築するものである。

まず目次に従って全体構成を概観すると、以下のごとくである。

目次  
序章  
序

- 一、論点の提出
- 二、研究目的と研究方法
- 三、先行研究の整理
- 四、論文の構成

第一章 〈勢〉の基本構造、概念、術語

- 一、〈勢〉の基本構造
  - (1) 文体としての〈勢〉
  - (2) 書体としての〈勢〉
  - (3) 書写技巧としての〈勢〉
- 二、概念としての〈勢〉
  - (1) 「…の勢（…之勢）」
  - (2) 「勢は、…が如し（勢如…）」、「勢は、…に似る（勢似…）」
  - (3) 「勢+形容詞（○勢○○）」、「形容詞+勢（○○勢○）」
- 三、術語としての〈勢〉
  - (1) 前術語—〈勢○〉  
〈勢薄〉〈勢逸〉〈勢動〉〈勢飛騰〉〈勢崩騰〉
  - (2) 後術語—〈○勢〉  
〈形勢〉〈筆勢〉〈收勢〉〈絶勢〉〈微勢〉〈仰勢〉〈数勢〉〈骨勢〉〈体勢〉  
〈字勢〉〈驚勢〉〈聘勢〉〈乏勢〉〈得勢〉〈気勢〉〈失勢〉〈取勢〉〈驚騰勢〉  
〈波勢〉〈峻勢〉〈螻勢〉〈極勢〉〈水勢〉〈懸勢〉〈識勢〉〈功勢〉〈筆端勢〉  
〈力勢〉〈認勢〉〈意勢〉〈異勢〉〈逸勢〉〈飛帆勢〉

第二章 〈象〉と〈勢〉

- はじめに
- 一、『易経』の〈象〉—「物を観、象を取る」より
  - 二、象形の文字と象形の思惟—六書の象形と指事より
  - 三、〈象〉と〈形〉のつながり
  - 四、象形の思惟—「若」、「如」、「類」、「似」
  - 五、「俯」、「仰」、「遠」、「近」と「縦横」—全体的な観照視点
  - 六、「法象」と「約象」—張懷瓘の説を中心に
  - 七、〈勢〉に関する点画字形の喩え
  - 八、〈勢〉に関する運筆用筆の喩え
  - 九、〈勢〉の代表—龍を中心に
- おわりに

### 第三章 〈形〉と〈勢〉

はじめに

- 一、点画の〈形〉と用筆の〈勢〉
- 二、文字の〈形〉と配置の〈勢〉
- 三、〈形〉と〈勢〉の対句
- 四、〈形勢〉についての三点より
- 五、〈体〉と〈勢〉の対句
- 六、〈体勢〉に関する語意について
- 七、〈字勢〉に関する品評語

おわりに

### 第四章 〈力〉と〈勢〉

はじめに

- 一、〈筆〉と〈力〉
- 二、評価基準の〈筆力〉
- 三、制作面における〈骨〉〈筋〉〈肉〉
- 四、品評面における〈骨〉〈筋〉〈肉〉
- 五、〈骨〉〈筋〉〈肉〉の概念と属性
- 六、〈筆力〉に関する品評語
- 七、〈骨〉〈筋〉〈肉〉を具える〈筆力〉の典型
- 八、〈力〉をもととする〈勢〉
- 九、〈筆勢〉に関する品評語

おわりに

### 第五章 〈勢〉の特性

はじめに

- 一、外部に現われた迫力性
- 二、有効的な布置の構成性
- 三、上下貫通の序列性
- 四、疾迅流暢の律動性
- 五、〈勢〉の相対性

おわりに

### 終章

- 一、〈勢〉の術語の属性—〈勢〉の特性を基にして
- 二、〈勢〉の関係図—〈勢〉の要素、〈勢〉の特性、「龍」の喩えを中心に

### 附章 〈勢〉の術語の一覧表

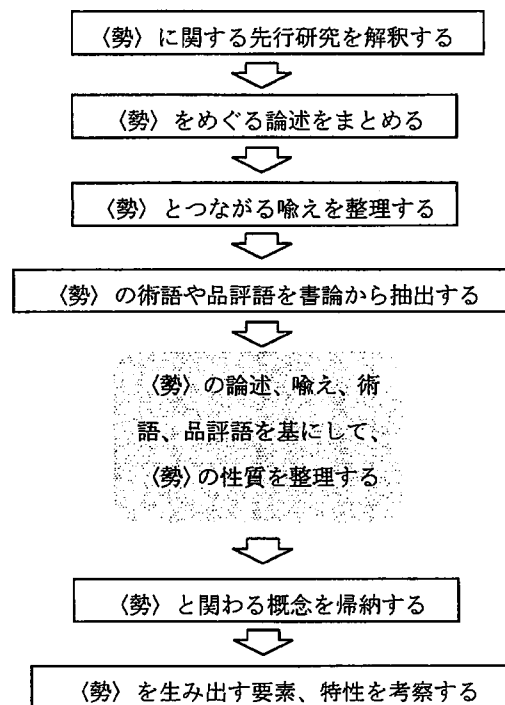
あとがき

主要参考文献

以下に、各章の要旨と特色を述べる。

## 序 章

本論文は、漢代より唐代にかけての中国書論における〈勢〉という概念を解明するものである。〈勢〉に関する論述が、『孫子兵法』の兵家思想、『韓非子』の法家思想、『文心雕龍』の文学思想の中に見られることから、古来より重要な概念であることは明白である。そのため多くの著作や先行研究が〈勢〉を論じてきたが、書論に見られる〈勢〉の研究は十分であるとは言い難い。書論の〈勢〉に関する術語としては〈筆勢〉、〈体勢〉、〈骨勢〉などが古くから用いられ、これらの術語の意味を解く文献は少なからずあり、現代でも書作や書の美しさを言い表す場合、〈筆勢〉という言葉で表現する例が多い。しかし書論における〈勢〉を解くためには、兵家、法家、文学といった思想を背景とするのみならず、〈勢〉から派生した語意、組み合わせられた術語をも分析しなければならない。これらの語意と術語を整理してはじめて、〈勢〉に関わる喩えをまとめることができ、言葉の属性を取り上げることができ、それと関連する概念を帰納できる。この研究方法の展開を図示すると、次のようになる。



〈勢〉に関する先行研究としては、次の二冊を取り上げた。

一、『勢 効力の歴史—中国文化横断—』

フランソワ・ジュリアン著、中島隆博訳（知泉書館、2004年）

二、『因動成勢』涂光社著、中国美学範疇叢書之五、百花洲文芸出版社、2001年

この二冊を含む他の先行研究の整理を通じて、本論文の研究目的として、以下の三点を上げることにした。

- ① 〈勢〉に関する術語を解釈すること
- ② 〈勢〉を生み出す要素を帰納すること
- ③ 〈勢〉の特性を整理すること

書論における〈勢〉の先行研究および散見する論説をあわせて考えると、〈勢〉は〈象〉〈形〉〈力〉と密接に関わることが指摘できる。本論文はこの〈勢〉と〈象〉〈形〉〈力〉との関わりを中心として〈勢〉を考察することにした。〈勢〉がある概念として頻繁に用いられるのは、他の概念と密接に関わっているからであり、〈勢〉を書名にする論と〈勢〉に関係する論によって〈勢〉がいくつかの概念から生み出されていることが判明したからである。この概念が〈勢〉を生み出す要素である。この要素には〈象〉〈形〉〈力〉がある。〈形〉と〈力〉については、先行研究に多く言及されるが、〈象〉への言及は少ない。しかしその内容に従えば、〈勢〉の生成にとって〈象〉の重要性を見逃すことはできない。〈象〉〈形〉〈力〉は〈勢〉を生み出す要素であると同時に、〈勢〉と結びついてそれぞれの術語が作り出される。よって〈勢〉を中心として〈象〉〈形〉〈力〉を検討する必要があることを論じた。

## 第一章 〈勢〉の基本構造、概念、術語

〈勢〉に関する術語の使い方とその意味を解明するため、「附章〈勢〉の術語の一覧表」の全211例を、歴代書論の時代順の配列と同義語から検討した。その結果、〈勢〉は書の美しさを表わす上で古くから一つの重要な術語として用いられ、後に他の概念と結びついて豊富な術語が創り出されたこと、これらの術語の出現に伴い〈勢〉の意味はさらに豊かになり、書作の鑑賞と審美にも大きな影響を与えたことが判明した。術語の語義を整理したことによって、〈勢〉が〈象〉〈形〉〈力〉の概念と密接に関わっていることが明確になり、以下第二章から第四章までの三章で、〈象〉〈形〉〈力〉それぞれとの繋がりを中心に論を展開するための基盤を構築した。

## 第二章 〈象〉と〈勢〉

〈勢〉を書名にする書論、あるいは〈勢〉に言及する書論には、擬人化と擬物化の手法で書の美しさを描写する例がたくさん見られるが、この手法が〈象〉と密接に関わっていることを論じた。書法美学における〈象〉の先行研究に、宗白華『芸術』北京大学出版社1999、金学智『中国書法美学』江蘇文芸出版社1997、井島勉『書の美学と書教育』墨美社1982がある。宗白華の書法の芸術性は象形によって生まれる視点、金学智の六書に対する「汎象形」であるとの視点、井島勉の点画字形の構成を中心とする抽象的芸術という視点から考えると、三氏ともに象形の思惟に触れており、象形の思惟が書の芸術性の根源である以上、〈勢〉の生成において肝要の位置を占めると考えられる。そこで〈勢〉の生成における象形性の文字の作り方、そして周りの物事や自然現象を観察する方法を分析した。

また〈勢〉に関する書論を考察すると、〈勢〉と密接に関係する喩えに「龍」という神秘的な動物を頻繁に用いて〈勢〉を表わしていることを見出した。龍は〈勢〉の特性を強調

するのみならず、さらに〈勢〉の概念を容易には把握できない神秘的な次元に導く働きを持つものであると考えた。よって、以下の考察の結果を得た。

- 1、〈象〉は、〈勢〉の生成に対して、連想の作用として働きかける。
- 2、〈象〉とは、局部的な形態と全体的な布置を連想することである。
- 3、この連想の作用は、主に流暢さを指す。
- 4、龍は〈勢〉の代表的な喩えであり、雄性的、神秘的な性質を持つ。

### 第三章 〈形〉と〈勢〉

〈形〉は〈勢〉に対して、互いに対応し依存する役割を担う。〈象〉は観察し、模倣し、会得する過程を表わし、人間の想像する意図を指すが、〈形〉は物事の見た目の様子や形態を指し、点画や字形の形態を指す。書論においては、〈形〉と〈勢〉の術語が頻繁に表われるので、〈勢〉と関わる〈形〉の存在を考察することは重要である。したがって本章では、点画と用筆、文字と配置、〈形〉と〈勢〉の対句、〈体〉と〈勢〉の対句などを考察した。この考察に従えば、〈形勢〉、〈体勢〉、〈字勢〉の品評語を説明することができ、以下のような考察結果を得た。

- 1、〈形〉と〈勢〉とを結びつけるのは、用筆法と結体法である。
- 2、〈形〉と〈勢〉には、自然現象を連想する働きが必要である。
- 3、〈形〉と〈勢〉は、〈静〉と〈動〉の関係である。このつながりの中で互いに依存し合い、制約し合う密接な関係を持っている。

### 第四章 〈力〉と〈勢〉

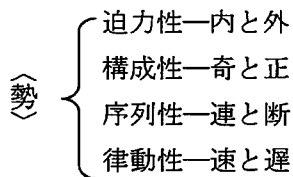
書論における〈勢〉の概念は、〈力〉と密接に関わっている。書論にみられる〈筆力〉に関する術語を通覧すると、生物の喩えが多いことに気づく。書を生き物として見る視点は、書の意味内容の伝達よりも、点画字形の構成への関心を示している。〈筆力〉に関する喩えには、特に〈骨〉〈筋〉〈肉〉の概念が頻繁にあらわれる。制作における〈筆力〉の表現については、『四体書勢』をはじめ、蔡邕、衛夫人、李世民らの説に拠ると、筆力の描写が自然現象から〈骨〉〈筋〉〈肉〉へと繋がっていることが浮かび上がる。〈骨〉〈筋〉〈肉〉は、用筆によりさまざまな組み合わせが可能であり、絶妙な均衡が取れたときにはじめて生物に比擬されうる生命力が生まれ、書としての〈筆力〉の表現となると考えられる。〈筆力〉を生むための〈骨〉〈筋〉〈肉〉は、書を品評し優劣を判断する際の基準にもなっている。〈骨〉〈筋〉〈肉〉の性質によって派生した品評の術語は、主に六朝から唐代の書品論に見える。『書品』、『書断』、『述書賦』を中心に、〈骨〉〈筋〉〈肉〉に関する品評の術語を取り上げ、〈筆力〉の美しさが如何に言い表されているかを整理すると、制作面においては〈骨〉〈筋〉〈肉〉は〈筆力〉を生むための重要な要素であると認識されていたことが明らかになり、品評面においては〈骨〉〈筋〉〈肉〉の概念によって〈筆力〉の美が分析されていたことが判明した。〈骨〉〈筋〉〈肉〉を組み合わせた術語の出現は、〈筆力〉への審美意識が生まれ

たことの証左である。よって〈勢〉と〈力〉の関係は、以下の三点にまとめられる。

- 1、〈勢〉は〈力〉のあらわれであり、〈筆力〉は〈筆勢〉の基である。
- 2、〈勢〉は、緊密な呼応、流暢や滑らかなつながりを持つ。
- 3、〈勢〉は、〈力〉の〈骨〉と〈筋〉に関わっている。

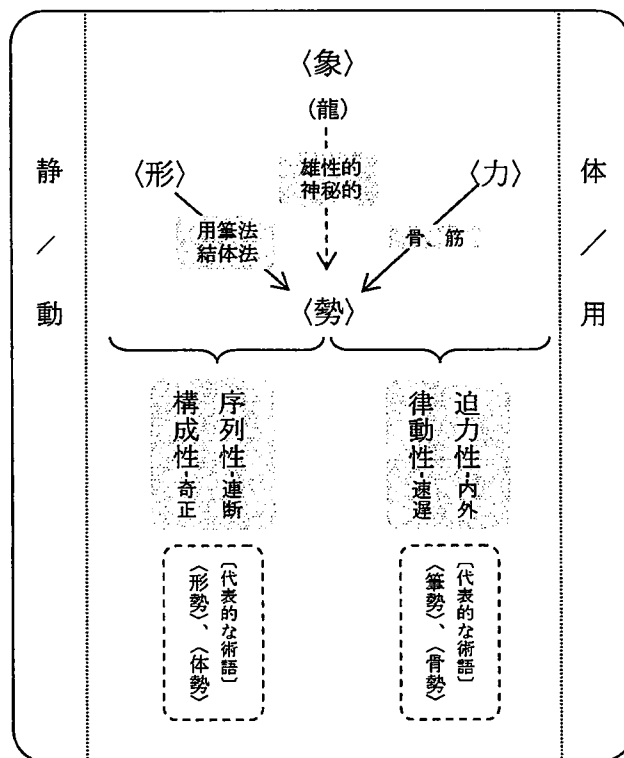
### 第五章 〈勢〉の特性

〈勢〉を生み出す要素である〈象〉〈形〉〈力〉によって、〈勢〉の特性を、外部に現われた迫力性、有効な布置の構成性、上下貫通の序列性、疾迅流暢の律動性に分けた。この四つの特性は、みな相対的な性質を持っている。すなわち迫力性—内と外、構成性—奇と正、序列性—連と断、律動性—速と遅である。この相対的な性質は、〈勢〉の生成において重要である。〈勢〉を生成するためには、相対的な性質である内と外、奇と正、連と断、速と遅を調和し、統一しなければならないことを論じた。この関係は、以下のようになる。



### 終章

〈勢〉の関係図





第一章から第五章までの考察結果をもとに、二点について総括した。

その一は、〈勢〉の特性を基にして〈勢〉の術語の属性を解明したこと。第五章でまとめた〈勢〉の四つの特性と、第一章の〈勢〉に関する術語（書論に見える用例「〇〇之勢」「勢如〇〇」「勢〇」「〇勢」など）を組み合わせて、それぞれの術語の属性を一つひとつ結びつけた（例：〈筆勢〉—迫力性・序列性・律動性／〈形勢〉—構成性）。

その二は、「〈勢〉の関係図」（前頁参照）によって、本論文を総括したこと。〈勢〉の全体像を解明するために、まず「〈象〉→〈形〉→〈力〉→〈勢〉」という大筋の流れを確認した上で関係図を作成した。この図は、〈象〉〈形〉〈力〉の三つの要素と〈勢〉との関係、即ち〈形〉の用筆法・結体法から〈勢〉へ、〈力〉の骨・筋から〈勢〉へ、〈象〉の喩えとしての「龍」が持つ雄性的・神秘的から〈勢〉への関係を明確にしたものである。さらに、迫力性・構成性・序列性・律動性の四つの特性と〈勢〉との関係、〈筆勢〉〈骨勢〉〈形勢〉〈体勢〉など代表的な審美術語の位置づけも一目瞭然になり、〈勢〉の全体像を可視化できることを論じた。

#### 附章 〈勢〉の術語の一覧表

唐・張彦遠『法書要録』津逮秘書本（台湾世界書局『芸術叢編』第一集 1962年）

北宋・朱長文『墨池編』朱氏刊本（上海書画出版社『中国書画全書』第一冊 2000年）

南宋・陳思『書苑精華』汪汝璠家藏本（北京図書館『芸術叢書』2003年）

上記三冊に収録される書論を原典とし、『法書要録』を基準にテキストクリティックしながら〈勢〉に関する術語を全部で211例抽出し、年代順に配列した。（注1）

なおこの一覧表は、第一章から第四章で考察するための基礎文献資料集に相当する。

1 「〈勢〉の術語の一覧表」に収録する漢代から唐代までの書論や詩文は、次の68点を数える。後漢・蔡邕『九勢八字訣』／魏・劉邵『飛白書勢』／西晋・成公綏『隸書体』、楊泉『草書賦』、衛恒『四体書勢』、索靖『書勢』／東晋・王珣『行書狀』、王羲之『筆陣圖』『筆勢論十二章』／南朝宋・羊欣『采古今能書人名』、虞龢『論書表』、王僧虔『書賦』『論書』、鮑照『飛白書勢銘』／南朝梁・蕭子雲『論書啓』、梁武帝『觀鍾繇書法十二意』『草書狀』『評書』『与陶隱居論書』、陶宏景『論楊許三僊君真跡』、庾元威『論書』、庾肩吾『書品』『上東宮古迹啓』、梁元帝『上東宮古迹啓』、袁昂『古今書評』／唐・虞世南『筆髓論』『勸學篇』、李嗣真『書後品』、徐浩『論書』『傳授訣』『用筆論』、『唐朝叙書錄』、『王羲之伝贊』、孫過庭『書譜』、褚遂良『搨本樂毅記』、李約『壁書飛白蕭字贊』『高平公蕭齋記』、張諗『蕭齋記』、歐陽詹『弔九江馱碑材文并序』、懷素『自叙』、王邕『懷素上人草書歌』、魯収『懷素上人草書歌』、任華『懷素上人草書歌』、蘇渙『懷素上人草書歌』、貫休『懷素上人草書歌』、皎然『張伯高草書歌』『陳氏童子草書歌』、沈亞之『叙草書送山人王傳父』、張懷瓘『書議』『書斷』『六体書論』『論用筆十法』『玉堂禁經』、李陽冰『上李大夫論古篆書』、唐玄度『十体書』、竇胤『述書賦』、蔡希綜『法書論』、李華『二字訣』、張弘靖『蕭齋記』、權德輿『唐太宗文皇帝飛白書記』『馬秀才草書歌』、賈氏『虞書歌』、岑文本『奉述飛白書勢』、韓方明『授筆要說』、盧携『臨池要訣』、顏真卿『筆法十二意』、韋統『墨藪』、林韞『撥鐙序』

## 2. 論文の審査内容および評価

本論文の研究目的は、〈勢〉に関する術語を解釈すること、〈勢〉を生み出す要素を帰納すること、〈勢〉の特性を整理すること、この三点を明確に論述し、論証することであり、その上で、〈勢〉に関する重要な術語の図式化を試みることにあった。そのため本論文は、序章、第一章～第五章、結章、あとがき、附章、主要参考文献から構成される。

一般に書の世界では、〈勢〉は〈筆勢〉を指し、〈力〉を持った〈形〉を意味する。動きのある字形を〈形勢〉といい、字形にあらわれた筆の動きを〈筆勢〉と呼ぶ。また〈形勢〉や〈筆勢〉にあらわれた気力を〈氣勢〉と呼んでいる。稿者はまず、漢から唐にかけての書論に見られるこのような〈勢〉の術語を「附章〈勢〉の術語の一覧表」に抽出して研究の基礎資料を収集しながら、膨大なテキストデータの一つひとつ解読して〈勢〉の概念と基本構造を明らかにし（第一章）、並行してフランソワ・ジュリアン『勢 効力の歴史—中国文化横断—』と涂光社『因動成勢』の先行研究などから、〈勢〉が〈象〉〈形〉〈力〉の三つの概念と密接に関わることを見出し、〈象〉と〈勢〉（第二章）、〈形〉と〈勢〉（第三章）、〈力〉と〈勢〉（第四章）に分けて順次考察し、それを〈勢〉の四つの特性として迫力性、構成性、序列性、律動性に帰納し（第五章）、最後に考察結果を〈勢〉の関係図として示した（結章）。このように、論旨、構成、展開ともに綿密かつ明解な論文になっていることをまず評価しておきたい。次に各章の研究成果に対する評価を記す。

序章では、論点の提出、研究目的と研究方法、先行研究の整理、論文の構成および展開（フローチャート）が簡潔に書かれており、理解しやすい導入になっている。

第一章「〈勢〉の基本構造、概念、術語」は、以下第二章から第四章までの三章で、〈勢〉と〈象〉〈形〉〈力〉それぞれとの繋がりを論じるための基礎研究の役割を果たしている。

〈勢〉に関する術語の使い方とその意味を解明するため、「附章〈勢〉の術語の一覧表」の全211文の歴代書論と他の古典文献を時代順に配列し、同義語から検討した結果、『管子』形勢、『孫子兵法』兵勢、『呂氏春秋』慎勢、『韓非子』難勢、『論衡』物勢などの「文体としての〈勢〉」、後漢・崔瑗『草書勢』から始まる〈勢〉を書名とする書論および「書体としての〈勢〉」、運筆・用筆や点画・字形の「書写技巧としての〈勢〉」に区別して明確に〈勢〉の基本構造を示した。「〇〇之勢」「勢如〇〇」「〇勢〇〇」「〇〇勢〇」の「概念としての〈勢〉」および前術語「勢〇」と後術語「〇勢」の「術語としての〈勢〉」では、それぞれ書論の用例を詳細の一つひとつ検討しており、術語集のような成果に仕上がっている。

よって、〈勢〉が書の美しさを表わす上で古くから一つの重要な術語として用いられ、後に他の概念と結びついて豊富な術語が創り出され、それらの術語の出現に伴い、書作の鑑賞と審美にも大きな影響を与えたことを明解に論証できている。

第二章「〈象〉と〈勢〉」は、涂光社、宗白華、金学智、井島勉らの各説を比較考察した結果、〈象〉が〈勢〉の生成において重要な作用をすることに着眼した。そのため『易』に、観察の視点（物を以て物を観る）、象形の思惟（物を観て象を取る）、模擬の連想があるこ

とを踏まえ、六書の象形と指事から象形の文字と象形の思惟が「類に依りて形を象る」ものであること、「天に在りては象を成し、地に在りては形を成す」とあるように〈象〉と〈形〉がつながること、象形の思惟は「若」「如」「類」「似」によって記述されること、観察の視点は「俯」「仰」「遠」「近」と「縦横」によって記述されること、張懷瓘が創出した術語の「法象（象に法る＝物を観察し模倣する）」「約象（象を約す＝物の特徴と性質を帰納する）」に繋がること、点画・字形の〈字勢〉と運筆・用筆の〈筆勢〉は自然現象で喩えられること、「龍」が〈勢〉の喩えに頻繁に用いられることを、順番に丁寧に論証できている。このように自然現象を観察する方法を分析したのは、第一章の基礎研究から、書論で〈勢〉を論じる場合に自然現象の喩えが頻繁に用いられること、〈勢〉は抽象的な概念であるので他の物事や喩えを用いないと説明しにくいこと、そしてそれは自然現象を主にして他の物の形態や様子によって説明するしか方法がないと考えたからである。そのため、「易は象なり、象なるものは像なり」（『易』繫辞上）から、文字の象形性と〈象〉、象形の思惟と〈象〉を結びつけ、連想的作用があるから〈象〉が〈勢〉の要素であるとする結論は首肯でき、特に「龍」を〈勢〉の代表的な喩えとみなした点は、穿った視点であると言えよう。

第三章「〈形〉と〈勢〉」は、フランソワ・ジュリアンが〈勢〉を論じる時にダイナミズムという術語で述べ、井島勉が〈形〉の美を取るために空間的な組織と時間的な力動性を把握しなければならないと述べ、譚学念が漢魏六朝の書論を中心に〈勢〉と〈法〉には並置、条件、同体の関係があると述べていることから、用筆が〈形〉と〈勢〉を生む第一原則であり、〈形〉と〈勢〉には密接なつながりがあると考え、まず点画の〈形〉と用筆の〈勢〉から解明した。この用筆法に次いで、結体法の文字の〈形〉と配置の〈勢〉を考察し、そして〈形〉と〈勢〉・〈形勢〉・〈体〉と〈勢〉・〈体勢〉・〈字勢〉を順次考察して、〈形〉と〈勢〉の三つの関係性を考察結果として挙げた。本章の論旨は明快であり、なかでも結体法の配置の〈勢〉を指摘できたことが重要である。

第四章「〈力〉と〈勢〉」は、まず書論に見られる〈筆力〉に着目し、その喩えに〈骨〉〈筋〉〈肉〉が頻繁にあらわれることから、それらの制作面と品評面から概念と属性を取り上げ、「筆力を善くする者は多骨にして、筆力を善くせざる者は多肉なり」などの〈筆力〉に関する品評語から〈筆力〉の典型を検討し、素早い流速と襲撃力という二つの〈勢〉の特徴をもとに〈筆力〉と〈筆勢〉の関係を考察し、最後に〈力〉と〈勢〉の三つの関係性を考察結果として挙げた。本章も明快に論述できている。なかでも「〈勢〉は〈力〉のあらわれであり、〈筆力〉は〈筆勢〉の基である」との指摘は当然の帰結であろうが、論理的に指摘できたことに意義がある。

第五章「〈勢〉の特性」は、第一章の基本構造から、第二章〈象〉・第三章〈形〉・第四章〈力〉に三分して論じてきた〈勢〉の要素を、迫力性、構成性、序列性、律動性の四つの特性を以て見事に帰納できている。

結章では、本論文の研究目的であった「〈勢〉の関係図」を構築し得ている。

以上から、本論文の研究成果として、次の三つを挙げておきたい。

①〈勢〉に関する術語の解釈では、『法書要録』、『墨池編』、『書苑精華』から書論の用例全211文を検出し、それを一つひとつ丹念にテキストクリティックした上で、字義の解釈を行ったこと。この成果は、今後〈勢〉の術語を考える場合の基礎文献資料となり、斯界に大きく貢献するものである。

②〈勢〉を生み出す要素が〈象〉〈形〉〈力〉の三つであると論証するなかで、〈形〉〈力〉は先行研究の指摘を踏まえながら補足でき、〈象〉は独自の新知見を提示できていること。目に見えなかつた=〈象〉には連想的作用があり、書論では「龍」の象徴的、神秘的な比喩を多用して〈勢〉を説くという記述は、本論文の大きな研究成果である。

③〈勢〉の特性を、迫力性、構成性、序列性、律動性の四つに帰納し、それらが同時に相関関係にあることを記述したこと。一般に書の世界では、筆力、筆勢、筆法があることが求められる。すなわち作品（客体）に「筆力がある、筆勢がある、筆法がある」ことが求められ、作者（主体）も「筆力がある、筆勢がある、筆法がある」作品を書こうとし、鑑賞者（作者を含む）は、その書に美を感じ、評価する。しかし〈筆勢〉の、〈字形〉から受ける〈筆力〉の強さ=迫力性、気脈の連続と貫通=序列性、スピード感や流暢さ=律動性については、誰もが理解できるものであるが、有効的な布置（章法）による構成性という特性の指摘は、独自の新知見である。

加えて、最後の結章に付された「〈勢〉の関係図」も創見である。但し、この関係図は言わば叩き台のようなものであり、爾後の研究によってさらに完備したものになろう。陳氏のさらなる研究に期待するものである。

このように従来指摘されず、看過されてきた〈勢〉の要素と特性を論証し、図示し得た点こそが、本論文の研究意義の所在であると評価する。

### 3. 結論

書道学専攻博士課程後期課程は、2013年7月29日に主査・副査担当予定者による陳柏仗氏の博士論文予備審査会を実施し、論文の提出が可能であると判断した。同年11月27日に審査委員会に論文の審査を委嘱されてからも引き続き直接の指導を行い、2014年2月10日に口述試験を行った。口述試験では、各委員が本論文に対して質疑した。陳氏はそれらの質問に率直に回答し、謙虚な態度に終始した。特に研究の姿勢、丁寧な解釈、緻密な構成と鋭い洞察力が高く評価された。その一方で日本語の記述に正確さが足りないことから、先に中国語で書いてから翻訳した方が良かったのではないかと指摘があった。この指摘は、論証をより正確に伝えるための要望であり、極めて高い評価であるが故の要望である。

よって審査委員会は口述試験を合格と判断し、将来の研究の発展を期待した。

以上の審査内容および評価に基づき、本論文を審査の対象とする博士（書道学）学位審査委員会は、陳柏仗氏が博士学位を授与されるに適格であるものと全員一致で判断したことを茲に報告する。